

---

# 理想と夢

アメジスト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想と夢

### 【Nコード】

N3115I

### 【作者名】

アメジスト

### 【あらすじ】

復讐のために力を求めた少年リオン。幼き日に目指した理想と夢。そして様々な人に出会い、何を思い、変わっていくのか。

## プロローグ（前書き）

初めて書く小説ですので感想や意見などを参考にしたいと思っております。間違った字や表現などがありましたら教えてください。ではよろしくお願いいたします。

## プロローグ

少年は父と母に憧れていた。父の様に強く、母の様に優しくなりた  
いと。

それが少年の理想だった。

自分の力を正義の為に使いたいと思った。

それが少年の夢だった。

ただどあの日から全てが変わった。

理想も、

夢も、

全てが黒く塗りつぶされた。

復讐のために力を求めて、

非情になるために優しさを捨てた。

そして十年がたった。

森の中に一人の少年が居た。

銀色の長髪に黒いコートを着ている。

その手に握っているのは剣。

周りには無数の切り裂かれた魔物の死骸がある。  
しかしまだ生きている魔物が少年に襲い掛かる。  
少年は剣を振るう。

その剣は魔物の体を簡単に切り裂いた。

そして全ての魔物が死んだ。

少年は周りに生きている魔物がない事を確認してから森を抜ける  
ために歩き出す。

向かう場所は世界一の魔法学園エルドラン魔法学園  
そこから少年『リオン・アルフォース』の物語は始まる。

## プロローグ（後書き）

魔法などについては次回書きたいと思います。  
これからも書き続けますので読んでください。  
よろしくお願いします。

## 第1話（前書き）

よく分からないかも知れませんが読んでいただきたいと思います。

## 第1話

この世界には三つの国がある。レイディル、ザーレイス、フォリアの三つだ。

レイディルは森や山など自然が多くある国で獣人やエルフなどが住んでいる。

ザーレイスは三つの国の中で最も強い力を持っている。様々な種族が住んでいる。

そしてフォリアは魔法で栄えた国でこれから向かうエルドラン学園もそこにある。

森を抜けて学園がある町、セイルドに着いたりオン。だが、

(どこに学園があるんだ?)

迷っていた。

(師匠の話は信用しない方がいいな)

心の中で誓う。

そして誰かに道を聞こうとした。

「すみません」

「はい？」

リオンが声をかけたのは学生服のような服を着た青の髪の少女だった。

「エルドラン学園に行く道を教えて欲しいのだが」

「エルドラン学園ですか？でしたら今から行くところでしたので一緒に行きませんか？」

おそらく学園に通う生徒なのだろう。

案内してくれると言うのだ。

「ありがとう」

「学園に行くところでしたので。では行きましようか。」  
そしてリオンと少女は歩いていく。

「俺はリオン・アルフォースと言うのだが君の名前は？」

「私はシエル・レイナスです」

「シエルか。いい名前だ」

「あ、ありがとうございます」

リオンに誉められて顔が真っ赤になっている。

「そ、それで、学園にどんな用があるんですか」

顔が赤いを見られないようにするためシエルは話題を変えた。

「学園には師匠に言われて来たんだ」

「師匠にですか？」

「ああ。けど道なんかを詳しく教えてくれなくて迷っていたんだ」

「そうなんですか」

リオンの言う師匠がよく分からないシエルだった。

「あ、見えてきました。あそこがエルドラン学園です」

シエルが指を指した方に目を向けるリオン。

そこには普通の学園よりも大きく、城のように建てられているエルドラン学園があった。

「道案内はここまででいいですか？」

「十分だ。ありがとう」

「それじゃあ私は寮に用があるので」

そう言っつてシエルは寮の方へ歩いていった。

シエルと別れたあとは迷ったりもしたが無事、目的地まで着いた。  
そこは、校長室と書かれていた。

「入るぞ」

そう言っつてノックもせず入る。

「ノックくらいしたらどうかね」

「めんどくさい。それで用はなんだ」

謝りもせず言いなりオン。

「謝るくらいしなさい。今回は仕方ないとしても」

「・・・分かった」

「よろしい。まあ用というのは学園に入学しろということですよ」

校長は笑顔で言う。

「・・・はい？」

聞き間違いかと思ったりオンはもう一度聞きなおす。

「もう一度言え」

「入学しろと言ったのです」

「・・・ふざけているのか。俺は学生をしている暇はないぞ。

まだ仕事が残っているしそれに・・・」

「それに？」

「俺の目的をまだ果たしていない」

リオンは怒りを込めて返した。

「残念だがもう決定事項だ。仕事はお前の師匠がやってくれる。目

的の相手を探す事もな」

「だけど・・・」

それでもなお反対するリオン。

それに対して校長は、

「それでは仕方ないな。お前の師匠が断ったら修行のメニューを増やすと言っていたのだが」

「入学してやるうじやないか」

驚く程の切り替えの速さだ。そこまで恐ろしいのだろうか。

「ではこれが制服だ」

初めから用意していた制服を渡す。

「魔法石は付けていていいのか？」

「いいですよ」

魔法石とは様々な属性の魔力を持つ石の事だ。武器や防具の材料になつたりする物もある。主に石に術式を刻んで魔力を込めて魔法を発動する物が多い。武器に付ける事もある。自分で術式を刻める者は少ないが、エルフは無くても魔法を使用できる。武器などを持ち運ぶ時は特殊な魔法石に収納したりする。

「それで、俺はこのクラスに入るんだ？」

「それなら2年B組に入ることになっているね」

手元の資料を見ながら言う校長。

「明日にそのクラスに入ることになるから今日は寮で休んでいていいよ」

そう言つて部屋の鍵を渡す校長。

「寮の場所は分かるね。明日の朝にまたここにくればいいから」

「分かった。じゃあ明日の朝に」

そう言つて部屋を出るリオン。

ドアが閉められてから少し経ってから校長は呟く。

「ここで君が昔の様に戻ってくれ事を願おう。君は幸せになって欲しいからね」

そして、運命は動き出す。

## 第1話（後書き）

次の更新は明日か来週になると思います。

## 第2話（前書き）

間違いがあるかもしれませんがお読みください。

## 第2話

目の前には人が倒れている。

自分の父と母だ。

その先には血に染まった剣を持っている人がいる。

剣は自分に向けられる。

そして……………

「夢か……………」

何度見たのだろうこの夢を。そう考えてしまっ。

朝から嫌な感じだ……………。

そう思いながら朝食を作ろうとして、ベッドから起きる。

寮の部屋はそれなりに広く、料理なども自分で出来るようにと調理器具が置いてある。

そして朝食を食べ終わり、制服に着替えて部屋を出る。

ちゃんとノックをする。

「入るぞ」

「どうぞ。入ってください」

ドアを開け部屋に入る。

「今日はノックして入りましたね」

「昨日言われたからな」

「そうでしたね。ではあなたのクラスの担任を紹介しましょう。入ってきてください」

校長に言われて入ってきたのは、

「私はギル・ハザークだ。よろしく、リオン君」

「よろしくお願いします」

青いコートを着ていて、長い髪を後ろで一つに纏めた二十代くらいの男性だった。

「これからクラスに向かうのだが、自己紹介が終わったら訓練所の方に向かってくれ」

「?、なんで訓練所に?」

「ちよつとしたお楽しみだよ」

「?」

全然意味が分からん。

「まあそれはあとにして案内してね。ハザーク先生」

「分かりました」

そしてハザーク先生と部屋を出る。

「では私が呼んだら入ってきてくれ」  
「分かりました」

そう言つて先生は教室へ入っていく。

その間に一人考える。

(どうする。学生のやる勉強なんて師匠とやったし戦闘に関しては問題ないだろう。交友関係もいいな)

「リオン君入ってきてくれ」

そう考えが終わつたあとに先生から声が掛けられる  
ドアを開けて入る。

「リオン・アルフォースだ。よろしく」

かなりぶきらっぽうだと自分でも思う。

そしてクラスを見渡す。

(魔力が多い奴はそんなに居ないけど戦闘経験のある奴があるのが一人か・・・)

そんな事を考える。

「ここからはリオン君に質問していいぞ」

それから様々な質問が来る。

「何処から来たんですか」

「どっかの山奥だ」

「ここに来た理由は」

「師匠に言われてだ」

「師匠はどんな人なの」

「ドSだ」

「彼女はいるの」

「いない」

そんな感じで時間は過ぎていく。

「そろそろ訓練所に向かう時間だから移動してくれ」

ハザーク先生がそう言うのとみんなが移動を始める。

「リオン君は私と行こう」

「分かりました」

そう言うってハザーク先生の後に歩く。

そして訓練所に着くと校長が居た。

「なにをするんだ」

「これから学園で一番強い人と戦ってもらおうよ」

「俺がか？」

悪く言うがこの学園の生徒がそれほど強いとは思わない。

「そうですね。ここで強い事を証明しておいて損はありませんから」

そう言うってくる校長。

仕方なく俺は了承した。

「では頑張つて来て下さい」

そして俺は訓練所の中へと入っていった。

中には観客席があり、そこに全校生徒がいた。

「こんなに居るのか・・・」

「大勢の前で戦うのは初めてか？」  
前に居る奴が聞いてくる。

恐らく俺の戦う相手なのだろう。だが、  
(女だったとは・・・)  
相手は女だったのだ。

長い黒髪をポニーテールにして刀を構えている。

「あんたが学園で一番強い奴なのか？」

「そうだ。女だからと油断しないことだ」

「まあ強い奴には油断しないけどな」

そう言っつて自分の武器を取り出す。

それは双剣だ。

片方は青、片方は緑色の剣だ。

そして剣の柄には魔法石が付いている。

「それがおまえの武器か？」

「ああ。あと二つほどあるけど使うのはこいつだけだ」  
そう言っつて双剣を構える。

「いくぞ」

「来い！」

自分の体に魔法による強化を掛けて走り出す。

「はっ！」

剣を振るう。

「くっ」

相手は少しだけ体勢を崩す。

そこにもう片方の剣で追い討ちをかける。

そしてもう一度、剣を振るおうとしたが、

「はあっ！」

風の衝撃が来る。

だがそれを魔力の障壁で防ぎ後ろに下がる。

「風の魔法か」

「その通り。しかしよくガードできたな」

「あれ位当然だ」

「ならこれはどうか」

相手が剣を振るうと風の刃が襲ってくる。

それを両手の剣で防ぐ。

だが数が多い。

そして、

「はぁ！」

刀に風を纏わせて切り掛かってくる。

それに対して俺も右の剣に風を纏わせる。だが、

「なに！」

相手が驚いている。

当たり前だ。かなりの魔力を纏わせたそれは竜巻の様だ。

「《風竜斬》」

そう呟いてから竜巻を開放する。

そして相手を巻き込み壁にぶつかる。

俺は相手の方に向かい、首元に剣を置く

「俺の勝ちだな」

「・・・私の負けだ」

俺は相手に手を差し出して立ち上がらせる。

「しかし最後の技はかなり魔力を込めていたな」

「やろうと思えばもっと出来るかな」

「そうか、私の名前はアスカ・セファー。三年生だ」

どうやら相手、アスカ先輩は年上だったらしい。

「俺はリオン・アルフォースだ。よろしくな、アスカ先輩」

「先輩は付けなくていい」

「そうか」

「勝ったようだねリオン君」

振り向いたら校長が居た。

「まあな」

「では今回の授業は終了しましょう。あとは帰っていいですよ」

終わっていいのかと思うが取りあえず言わないでおこう。

「ならリオンあとで私の部屋に来ないか？」

「なぜだ。その前にお前は女子寮だろう」

「いや、私以外にあと二人呼ぶつもりだ。内一人は男子だぞ」

そうして少し考えたあと

「なら行こうか」

「分かった。迎えには私が行くから部屋を教えてください」

そうして部屋を教えて別れて自分の部屋に戻る。

途中何度か話掛けられたりしたが適当に返事をして部屋に戻った。

リオンが変わり始めるのはもう少し先かもしれない。

## 第2話（後書き）

次は1週間程先になると思います。

### 第3話（前書き）

更新が結構遅れました。

これから遅くなりますがなるべく速くしたいと思います。  
よろしくお願いします。

### 第3話

「さてと」

部屋に戻ってきたがなにもする事がない。  
寝る訳にもいかないしな。どうしようか。

「・・・なにか作るか」

そう思い、空間魔法で部屋にもう一つの空間を作り出す。  
外からは分からないから便利だ。

「よし」

作ったのは工房だ。

いつもここで武器や防具を作っている。

材料も自分で用意するようだが。

まあどうでもいいから作るか。

ドアをノックする音が聞こえてきた。

アスカが来たのか。

「入っていいぞ」

ドアが開き、アスカが入ってきた。

「遅かったな」

「他のメンバーがなかなか集まらなくてな」

「そうか」

喋りながらも手は武器を作っている。

「空間魔法で工房を作ったのか。すごいなお前は」

「まあ魔法と武器を作ったりする事しか自慢できないがな」

俺は剣技なんかは極める事は出来ない。

ある刻印によって出来るようにしたただけだ。

そうしなくては強くなれなかったから。

「これが作り終わるまで待ってくれ」

「分かった」

「出来た」

作ったのはダガーだ。

無属性の魔法石を使った物で切れ味がいい物だ。

「なかなかいいダガーだな。普通の物よりいいぞ」

「店で売っているような物といっしょにするな」

これは普通の素材を使ったが市販で売っている物より性能がいいからな。

「そうか。悪かったな」

「分かればいい。じゃあそろそろ行くか」

「そうだな」

そう言っただけで俺とアス力は部屋を出た。

「ここが私の部屋だ」

アスカの部屋は普通より物が少ないが鍛錬用の木刀が何本もあった。

「他の奴らは？」

「呼んでくるから少し待っていてくれ」

そう言っただけで部屋の奥に行くアスカ。

そして他の二人を連れてきた。

その中に知っている奴が居た。

「シエルか？」

「はい。アスカさんが連れてくる人がリオンさんだったのは驚きませんでしたけど」

俺も驚いた。まさかシエルが居ると思わなかったからな。

そしてもう一人、

「オレは2年のジル・セファード。よろしくなりオン」

「知っていると思うがリオン・アルファード。よろしく」

これで全員の名前が分かったが気になる事がある。

「ジルとアスカは姉弟か？」

「そうだけ。けどあまり似ていないだろ」

「確かにあまり似ていないな」

髪の色とか全然違うしな。

「それで俺を何で呼んだんだ？」

「それはギルドを結成したいからだ」

「ギルドを？」

ギルドは何人かの人が集まって作る会社みたいな組織だ。

魔物を狩る事を仕事にしたりするのが主だが情報や武器を作る仕事を  
する所もある。

けど俺はあまり入りたくないな。

今まで一人でしてたし仕事によつては人殺しもしてたしな

「ギルドのメンバーは足りてるのか」

「いや、あと一人足りなくてな」

そこで俺が入って欲しいという事か。

「悪いが俺は入れないぞ」

「何を言っているリオン。お前が作っているギルドだろう」

「・・・は？」

どういう事だ。

「お前がギルドを作るためのメンバーを集めていると聞いたのでな」

「ちよつと待て！ギルドなんて作ってないぞ！」

「校長が言ってたぞ」

またあいつか！

「ギルドを作らなければメニューを倍にするとか言ってたな」

あいつ人を脅す気か！

だがメニューを増やされたくはない。

「・・・はあ」

諦めるか。

「それであと一人なのだがな、明日には集めていると言っていたぞ」

「明日までだと！」

期間が短すぎるだろ！

皆に協力して貰うしかないな

「この学園で強い奴は居ないのか？」

仕事を早くする為になるべく強い奴が良いからな。

「それなら2年のレオンだろ」

「そいつは強いのか？」

弱かったら意味が無いからな

「強いぜ。Bランクの魔物を倒したとか聞いたしな」

Bランクの魔物を倒したのか。

「よし、そいつを明日にでも誘うぞ。それで良いな」

「分かった」

よし。これでいい。

「じゃあ今日はもう部屋に戻るか」

「そうだな」

それから皆は自分の部屋の戻っていった。

リオンの仲間が集まり始めている

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3115i/>

---

理想と夢

2010年10月10日11時16分発行